

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI / 12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院・教 育委員会等	実施機関名・連携機関名 ※実施機関名、及び連携機関名（ある場合のみ）を記載してください。 福島大学大学院教職実践研究科（教職大学院）
コラボ研修プログラム	事業名：【NITS・福島大学大学院コラボ研修】 福島の未来を拓く「新・理科セミナー2024」
支援事業報告書	研修等名：【NITS・福島大学コラボ研修】 主タイトル：福島の未来を拓く「新・理科セミナー2024」 副タイトル：～全国からの理科教育の風を感じる～ 開催日時：令和6年12月7日（土）13時00分～16時30分 開催場所：福島大学（福島県福島市金谷川1番地） 参加人数（総数）と参加者の属性：総数：117名 小学校教員78名、中学校教員3名、大学生3名、大学院生4名、教育行政18名、大学教員6名、企業2名、その他3名

目的：

福島県の教員には、東日本大震災及び原子力災害という、本県の現状を踏まえた、「福島ならではの」教育を推進することが求められる。理科教育においては、問題を科学的に解決する力や自然観の涵養を重視しており、福島県の復興に欠かせない資質・能力の育成を目指している。また、福島県教育委員会では、「未来へはばたけ！イノベーション人材育成事業」を実施し、理数教育の授業改善を通して、復興を担う子供たちに必要な力の育成に努めている。そこで、福島県教育委員会と福島大学との連携を図り、理科の授業づくりの研修を通して、未来の福島を担う人材の育成のための理科教育の在り方を考えるとともに、「イノベーション人材の育成は、福島県の教員に課せられた使命」という、福島県における教師マインドの共有を目指すことを目的として、本事業を展開する。

具体的な内容として、令和6年度または令和6年度以降に小学校理科教育を推進している全国規模の団体が主催する全国大会会場校の研究推進役の教員を招き、子供の姿を基に、これからの理科教育の在り方や授業づくりの視点について参加者と共に協議を深め、参加者一人一人が、理科教育についての問題意識の醸成を図る。

内容：※全体発表の内容をテーブル起こしするなど、具体的に記載してください。

【パネルディスカッション】13：10～15：30

パネリストは、野口卓也先生（福島市立三河台小学校教諭）、川村悠太先生（広島市立八幡東小学校教諭）、堀道雄先生（滋賀県守山市立河西小学校教諭）の3名である。上記のパネリストは、日本の小学校理科の研究を推進している団体（全国小学校理科研究協議会、ソニー科学教育研究会、日本初等理科教育研究会）が主催する全国大会を、令和6年度に開催した学校、もしくは令和7年度に開催する予定の地域の研究推進役である。コーディネーターは、ソニー科学教育研究会福島支部事務局の佐々木雄一郎先生（福島市立大森小学校教諭）が行った。野口先生は「自らの問題を科学的に解決するプロセスを愉しむ子ども」というテーマで、川村先生は「学ぶことを楽しみ、責任をもって行動する子どもの育成ー子どもたちに「委ねる」生活科・理科を通してー」というテーマで、堀先生は「粘り強く自然の事物・現象に向き合い、自己の学びを調整しながら探究し続ける姿を目指して」というテーマでの主張がなされた。

少人数での協議を踏まえ、参観者からは、「根拠を基に意見を述べる子供の育成のための手立て」についての質問があり、理科だけではなく他教科における取組も紹介され、教科等横断的な視点でのカリキュラム・マネジメントの重要性が示唆された。また、『責任』と『委ねる』の間にジレンマが生じるのではないかと心がけていることは何か？という質問があり、「委ねる」と「放任」についての議論が深まった。

【対談】15：40～16：30

対談は、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の有本淳氏と、本セミナーの企画者である福島大学の鳴川哲也（前文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官）で行った。

まずは、パネルディスカッションでの話題を基に、子供の姿を基に、理科教育について語り合うことの重要性について話し合われた。有本氏からは、教科担任制が導入されていることを踏まえ、教師自身が協働的に学ぶことが重要であるとの話があった。また、有本氏は、小学校、中学校そして高等学校の授業や研修会等の様子を基に、問題解決の形骸化を指摘された。「個別最適な学び」というキーワードについても、「最適」を考えるならば、子供

の実態を理解しなければならないはずなのに、学習形態が先に述べられていることが多いことを指摘された。今後の理科の授業の在り方を考える上で重要な示唆であった。

成果： ※参加者の声など客観的な情報・データとともに記載して下さい。

- 参加人数は 117 名であった。福島県内はもとより、県外（青森県、宮城県、山形県、茨城県、東京都、新潟県、石川県、三重県、滋賀県、大阪府、兵庫県、島根県、広島県、高知県、福岡県、熊本県、鹿児島県）からの参加者があった。全国各地からの参加者があったことは大きな成果である。また、福岡県、滋賀県、島根県には、サテライト会場が設置され、それぞれの場所に参集しての協議が行われた。
- 実施後のアンケートには、「登壇した方々や参加者の理科教育に対する熱意を感じました。自分ももっと勉強しなければと思いました（指導主事）」、「私は理科に苦手意識がある子どもだったので、小学校教員になった時に楽しい理科ができるのか・子どもが理科を好きになることができるような授業ができるのか、不安な気持ちでした。ですが、今回ご講話いただいた先生方の実践は非常にわくわく感があり、子どもが「おもしろそうだな」「やってみよう」「生活にも生かせそうだ」と思うことができるような授業だったので、ぜひ参考にさせていただいて、教員になったら子どもが理科を楽しむことができるような授業を実践できるよう、頑張ります。セミナーに参加して良かったです。ありがとうございました（大学生）」、「今年初めて理科の授業をしてみて、楽しさや難しさを感じていました。今回のセミナーでたくさんの実践を知ることができ、今後のモチベーションアップにつながりました。また、理科について専門では無いため大変学びになりました（小学校教員）」などといった感想が寄せられた。これらの事から、本セミナーには一定の成果があったと考える。

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

- 本セミナーでは、小学校理科における各種団体の全国大会の推進役である教員を招聘し、その取組の発表を基に各自の取組を内省し、さらに、小グループでの対話によって、さらに問題意識を醸成できるような流れで構成した。また、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官を招き、前調査官との対談を行うことにより、問題意識を醸成する方向性も確認できるようにした。このような構成は、参加者の「問題意識の醸成」には、効果的であったと考える。一方、アンケートでは、「協議の時間がもっとほしい」という声があった。半日開催ではなく、1 日開催も想定し、今後の本セミナーの充実を考えたい。

アイデアや工夫したこと： ※実際の様子がより分かるよう、必要に応じて写真や図を用いて説明してください。

- 参集型とオンライン型の参加形態にしたことで、県内はもとより、県外からも多くの参加者を得て開催することができた。
- 小学校理科の教科調査官の 7 代目と 8 代目の対談は、一昨年度、昨年度実施した「新・理科セミナー」に引き続き、今回も実施した。今後も定例化していきたい。
- セミナー終了後も、YouTube 限定公開でセミナーの様子を公開し、振り返りができるようにした。
- Plant 全国教員研修プラットフォームでの広報も行った結果、Plant で開催情報を得た方が参加した例が 6 件あった。今後も有効に活用したい。

【パネルディスカッションの様子】



【小グループでの協議の様子】

【対談の様子】

